

館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

7月 1日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 2章1～20

「救い主の誕生」

今日の交読箇所は、クリスマスには必ず読まれるところである。歴史家ルカは、イエス様の誕生が当時の世界史の背景と深い関わりがあった事を明らかにしている。ローマ皇帝による定期の戸籍調査は14年ごとに行われ、徴税と徴兵の二重の目的で行われたと記録に残っている。だからイエス様の誕生がいつ頃かという年代が推測できる。その救い主の誕生を御使いから最初に告げられたのは、貧しい羊飼いであった。御使いの言葉を聞いた彼らは幼子を探しに行き、彼らを見つけると、自分たちに告げ知らされた内容をヨセフとマリヤに語り、「見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、また賛美しながら帰って行った」(20節)。何と美しい光景だろう。

7月 2日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 2章21～40

「シメオンとアンナ」

御使の告げたとおり、幼な子はイエスと名づけられました。律法のとおり、きよめの期間が過ぎたとき、すなわち生後40日目に、両親は幼な子を連れてエルサレムの神殿にやって来ました。幼な子を主にささげるためでした。今も家庭に赤ちゃんが与えられた場合、教会で献児式が行われます。主に感謝をささげ、養育を任せてくださった主の御心にふさわしく信仰を育み、養育するために、主の助けと祝福を願うのです。信仰と聖霊に満ちた高齢のシメオンもアンナも、祈りのうちに救い主のおいでを待ち望んでいました。彼らは、この日、ちょうど神殿には行って来たヨセフとマリヤ、そして幼な子イエス様にお会いしたのです。主の約束と導きは確かでした。イエス様は、神様が万民のまえにお備えになった救い、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光なのです。

7月 3日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 2章41～52

「少年イエス様」

イエス様の少年時代に関する貴重な記事です。12歳のイエス様は過越の祭を守るため両親に連れられてエルサレムの神殿に出かけました。ナザレから南に徒歩の旅です。帰路についた両親は一日後、旅のグループにイエス様が見当たらないことに気づきました。捜しながら道をひきかえし、とうとう神殿に戻ってきました。イエス様は神殿で教師たちのまん中に座って話を聞いたり質問し

ていました。律法のプロがイエス様の賢さに驚嘆したほど、旧約聖書を深く心に刻んでいました。母の問いに、ご自分が父なる神様によって地上に遣わされたことを思い「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」とお答えになったのです。

7月 4日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 3章1～20

「バプテスマのヨハネ」

ここで著者のルカはバプテスマのヨハネを公式に紹介する。「皇帝テベリオオ在位の第15年...神の言が...ザカリヤの子ヨハネに臨んだ」(1、2節)という冒頭の言葉はヨハネの宣教という前ぶれをもって、イエス様の公生涯の開始を告げる。これはルカがイエス様を世界の歴史の流れに位置づけているからだ。荒野にいたバプテスマのヨハネは集まってきた人々に、悔い改めなければ救われないことを熱く説く。彼は、良い実を結ばない木を農夫が斧で切り倒すように、神様の裁きを告げる。これは脅しではなく、新しい、清い心を作る為である。そしてヨハネは各自が「悔い改めにふさわしい実を結べ」と勧めている。

7月 5日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 3章21～38

「イエス様の系図」

イエス様が洗礼を受けられたのは、洗礼を受けることが神のみこころであり、私たちの模範となるからである。23節には「イエスがは宣教を始められたのは、年およそ30歳」とある。それまでイエス様は人々の考えによれば「ヨセフの子」で、その系図をさかのぼれば、アブラハムはおろかアダムにまで達する。ユダヤ人が「われわれの先祖はアブラハムだ」などと考える自慢の種は、どこにもない。全ての人イエス様と同じ係わり合いを持つのである。全人類はアダムの子孫で、ギリシャの詩人が「われわれも、...その子孫である」(使徒17:28)と言った通り、神様の子孫である。ですから、人々が熱心に追い求めて捜しさえずれば、神を見出せるようにして下さった」(使徒17:27)のである。

7月 6日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 4章1～13

「荒野の誘惑」

イエス様は洗礼をお受けになった後、御霊の導きのうちに荒野で断食と祈りのときを過ごされ40日に及びました。このとき悪魔の誘惑をお受けになりました。イエス様は神であられ、全てをみ手に治め最高の権威をお持ちです。悪魔の誘惑に即刻勝利できる権威をお持ちにも関わらず、人間としての制限のなかで、神の権威や自由を敢えてお使いになりませんでした。救い主の使命を完全に果たすためでした。わたしたちには思いも及ばない誘惑だったのではないか

と想像します。悪魔は神様の救いのご計画を無効にしようと誘惑しましたが、イエス様は勝利なさいました。み言葉による勝利のお姿は、信仰をもって主により頼む全ての者に対して、同じように、み言葉によって勝利を得られる、という模範となってくださいました。

7月 7日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 4章14～30

「この聖句は成就した」

27節の「多くのらい病人」を「重い皮膚病にかかった多くの人」に読み替えてくださるようお願いいたします。イエス様は、聖霊に満ちあふれガリラヤへ帰られました。安息日に会堂で、会堂司から羊皮紙の巻物のイザヤ書が手渡されました。イエス様はイザヤ書61章をお読みになり「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」とお話されました。旧約聖書で預言された救い主が今ここにいらっしゃるのです。悪魔と罪に縛られた人々に、真の解放と自由を与えてくださる救い主の訪れは、主が与えてくださる恵みのはじまりなのです。しかし、ヨセフの子ではないか、と故郷の人々は言いました。列王紀上17章、列王紀下5章の通り、多くのやもめがいたのに、エリヤはシドンのやもめにだけつかわれ、エリシャの時代イスラエルに重い皮膚病にかかった多くの人々がいたのに、他国シリアのナアマンだけがきよめられた、そのように、信仰によって主を待ち望む者に恵みが与えられるのです。

7月 8日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 4章31～44

「解放のみわざ」

イエス様には権威があり、そのお言葉にも権威がありました。人々はお言葉の権威に驚きました。イザヤ書の通り、イエス様は悪霊に支配されていた人々を解放し、病気の人々を治し病気からも解放してくださいました。ペテロの姑もそのひとりでした。悪霊が叫びながら出て行ったのですが、イエス様は彼らに物を言うことをお許しになりませんでした。なぜでしょうか。イエス様がキリストである、と最もよく知って恐れていたのは悪霊たちだったからです。ナザレの人々をはじめ、当時の多くの人々がイエス様の権威あるお言葉を聞き、めざましいみわざを見ました。しかし、イエス様を、預言された救い主、キリストであると信じ受け入れる人々はわずかでした。イエス様は、神の国の福音を述べ伝えるためにつかわされた、明確な使命のもとにさらに町々で教えを説かれました。

7月 9日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 5章1～11

「人間をとる漁師に」

これまで主としてユダヤ教の会堂で教えておられたイエス様は、今やゲネサレ湖畔(ガリラヤ湖)に立っておられる。大勢の人々が神様の言葉を聞こうとして押し寄せてきたので、イエス様は、シモンと呼ばれたペテロの小舟に乗り、舟の上から人々にお話をされた。お話が終わった後に、イエス様はペテロに「沖へこぎだし、網をおろして漁をしてみなさい」(4節)と言われた。ペテロはこの言葉に驚いて、漁師の私たちが「夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」(5節)と半信半疑ながら従った。その結果は大漁だった。ペテロは、神様の力と、それを信じなかった自分の罪深さを知らされた。この時、イエス様はペテロを「人間を取る漁師」即ち、伝道者としてお召しになった。

7月10日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 5章12～26

「罪を赦す権威」

12節に記されている「全身重い皮膚病の人」の癒しも、その後の「中風の人」の癒しの記事も、イエス様が、地上で罪を赦す権威を紹介する契機として述べている。23節では「あなたの罪はゆるされたと言うのと、起きて歩けと言うのと、どちらがたやすいか」と問いかける。中風の人の癒しの場合、イエス様の言葉には病気を直す力も、罪を赦す力も備わっていることを明らかにされた。だから「『人の子(イエス様)は地上で罪をゆるす権威を持っていることが、あなたがたにわかるために』と彼らに対して言い、中風の者にむかって、『あなたに命じる。起きよ、床を取り上げて家に帰れ』」(24節)。イエス様は、後日弟子たちを世に遣わす時、彼らが罪の赦しをもたらすメッセージを携えて行く事を予告している(24:47)。

7月11日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 5章27～39

「新しい歩み」

レビとは取税人マタイです。マタイは、イエス様に従って新しい歩みを始めました。彼は、取税人時代の仲間たちにイエス様を紹介したかったのでしょうか。自分と同じように、彼らも主の愛を知って主を受け入れ、新しい生活に進んでほしいと願ったのでしょうか。自分の家で盛大な集まりを開きました。マタイを始め仲間たちは、イエス様の「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。このお言葉を聞いて、どこにも見出せなかった希望の光と真の愛を、イエス様というお方に見たことでしょう。新しい着物と新しい皮袋の

譬は、ユダヤの人々が、神に受け入れられようと築き上げたこまごまとした事々から解放されるべきこと、イエス様を信じて始まった新しい歩みは、イエス様の命の充満と、み言葉の光に育まれるべきだと教えて下さったのではないでしょうか。

7月12日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 6章1～11

「礼拝と愛と善行」

出エジプト記20章に神様がお定めになった、人間が守るべき十戒が記されています。第四戒には「安息日を覚えて、これを聖とせよ」とあります。イエス様は主なる神様です。安息日を定めて、この日を主を礼拝する日としてくださった方です。しかし、ことにパリサイ人たちは、人間が定めた安息日の規定を守ろうと努力していました。本来の教えである、安息日に主に感謝し、主を礼拝するということを忘れて本末転倒でした。その本末転倒ぶりに気づかせて下さるためにも、イエス様は、会堂で、安息日に、人々の見ている前で、あえて手のなえた人を癒してくださいました。主を愛し、隣人を愛し、善を行うことは御心にかなったことです。彼らはこのことに気がついて、柔らかな心で悔い改め、主を愛し、隣り人を愛し善行に励むべきでしたが、11節のようでした。

7月13日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 6章12～19

「12使徒の選び」

イエス様は山に行って、夜を徹して祈られた。夜が明けると、弟子たちの中から12人を選び、これに使徒と名づけられた。使徒とは、ギリシャ語でアポストロスと言い、派遣される者という意味である。それは使節あるいは大使の意味に用いられる。選ばれた12使徒たちは、皆平凡な人々である。学者や権力者、財産家や有名人がいるわけではない。性格も職業も様々だ。後に愛の人と言われたヨハネも、短気な雷の子だ。あとでイエス様を裏切るユダもいる。漁師もいれば、取税人や反する立場の熱心党员もいた。けれどもそのような彼らがキリストにあって、互いに愛しあい、互いに仕えあって一つとなって奉仕していったのは素晴らしい。それは彼らが自分で選んだのではなく、選ばれたからである。

7月14日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 6章20～26

「4つのさいわい、4つのわざわい」

ここには4つのさいわい、4つのわざわいが対照的に記されている。20節と24節、21節前半と25節前半、21節後半と25節後半、22節と26節である。「貧

しい人」「いま飢えている人」「いま泣いている人」「人の子(キリスト)のために、排斥し、ののしり、汚名を着せるとき」はさいわいである。反対に「富んでいる人」「今満腹している人」「今笑っている人」「人があなたがたをほめるとき」は、わざわいである、という。このような事は、世の常識からでは考えられない。むしろ逆である。しかしイエス様は、こうした世の常識は、物質的尺度、この世の尺度、表面的な尺度であって、罪によって歪められた人間の尺度に過ぎないと言うのであろう。そのような尺度から解放されて、霊的な真理、内面的な現実、終末の到来の見地から見る時、人はイエス様の言われた事が理解できる。

7月15日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 6章27～38

「ゴールデンルール」

イエス様が望まれた信仰者の生き方です。わたしはこれを守ることができるか、と問うなら「どうやっても、守ることができません」と答えるほかありません。あるいは形だけ守る、という方法もあります。しかし、イエス様はこう教えてくださいました。31節、「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」。マタイによる福音書7章12節のみ言葉に代表される黄金律です。これは信仰者の倫理の基礎であり、人間関係の基本です。35節の「そうすれば受ける報いは大きく」とある、大きな報いとは、父なる神様と似た性質の者とされる、という祝福です。「いと高き者」とは天のお父様である神様です。イエス様を信じたことによってすでに神の子としていただきましたが、その立場にふさわしい者、天の御国に住むにふさわしい者と造りかえてくださる、という祝福です。

7月16日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 6章39～49

「恵みの量り」

「いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか。」(コリント人への第一の手紙4章7節)。「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい。」(マタイによる福音書10章8節) 主の赦しと恵みによって生かされていることを忘れないように歩みたいものです。そうするなら「自分の目にある梁」を認めることができ、謙遜と愛をもって生きられるでしょう。良い木は良い実をならせません。ですから、造りかえていただいて、良い木にしていきたいものです。また、心を造りかえていただいて、心の倉に良い物を満たしていただきたいものです。そして主に土台を置いて歩みたいものです。

7月17日 今日の通読箇所 エレミヤ書 46章1～12

「カルケミシ戦」

ここから「詩文型」の預言が始まる。個々の事件についてその都度示された預言集だ。BC605年、当時強大だったエジプトは遠くユフラテ河近辺カルケミシまで遠征してバビロンと戦った。エジプトにいたユダヤ人はこの勢いを見て、エジプトが仇敵バビロンをやっつけてくれると期待したろう。しかしエレミヤの預言どおり、エジプト遠征軍は大敗を喫しさんざんな姿で退却した。その結果今度は逆にバビロンの攻撃を受け、エジプトはその国内までも踏みにじられることになる。これが[13節]以下の預言だ。我々も世の動きから離れられないが、それでもいつも主の導きの中に生きる事が大切だ。

7月18日 今日の通読箇所 エレミヤ書 46章13～24

「敗戦の詩」

聖書には美しい詩が多い。ここに記された「バビロンのエジプト侵略の詩」もすばらしくまた恐ろしい詩だ。ミグドル、メンピス、タバネスなどは音に聞こえたエジプトご自慢の大都市だ。アピス、雄牛などはエジプト人がいつも礼拝した偶像だ。そしてエジプト王パロの名は「偉大な征服王」として世界を震え上がらせたのだ。しかしいまはその名も「騒ぐだけでチャンスを失う敗北者」と呼ばれ、エジプトの雄牛は、背中にたかるはえも追い払えない弱い子牛に例えられる。真の神の怒りと裁きの日が来てエジプトの高ぶりの日は過ぎ去ったのだ。「万軍の主という名の王は生きておられる」からだ。

7月19日 今日の通読箇所 エレミヤ書 47章

「ガザの侵略」

ガザは今度、イスラエルとPLOの話が合えば、パレスチナ人自治地域になる予定なので、よく新聞に出る。昔は歴代にわたってイスラエルを圧迫したペリシテの有力都市だった。今彼等もバビロンの侵略を免れることはできない。アシケロンもペリシテの都市。ツロ、シドンもフェニキヤと呼ばれる地中海の有力都市だ。いずれもバビロン軍の被害を受ける。心身ともに弱くなった父親は、もう子供を助けられず自分が逃げるのがやっとだ。当時の捕虜はみな頭を剃られた。ガザではもうその作業が大量に開始されたと言う。

7月20日 今日の通読箇所 エレミヤ書 48章1～13

「寝かされた酒」

ガザ、モアブなどはイスラエル周辺の小国だが、イスラエルが神に裁かれてバビロン軍に蹂躪されたとき、火事場泥棒のようにイスラエルに侵入して略奪し

た。彼等がそのまま安泰でいられるはずがない。いまエレミヤによってその裁きが宣告される。11 節には今までモアブが比較的太平だったことが言われている。彼等は静かに大切に長期間寝かされた上等の葡萄酒のようだ。しかしいま裁きと滅亡の時が来たのだ。日本も案外、平和で太平楽でこの葡萄酒のようであるかも知れない。

7月21日 今日に通読箇所 エレミヤ書 48章34～44

「亡国の山河」

モアブ滅亡の預言が続いている。ある人が戦争中に「某国の某艦隊が某港で全滅した」というニュースを聞いた。戦争が終わって飛行機でその港の上空を飛ぶと、半ば沈んだその艦隊の残骸が見えた。彼は言う「全滅とはなくなってしまふことではない。役に立たなくなることだ」と。我々も姿や形は生きながら、実はそのクリスチャンの实质は罪のために滅亡している、という悲しい場合もあり得るのだ。モアブは滅びてもその土地は残る。「国破れて山河あり」という有名な詩のように。しかし、我々も「遺跡クリスチャン」や「遺跡教会」などになりたくない。

7月22日 今日に通読箇所 エレミヤ書 49章1～6

「アンモンのラバ」

アンモンはイスラエルの東方の国で、今はヨルダン王国領だ。当時の首都ラバは、今ヨルダンの首都アンマンとなっている。彼等はイスラエルの弱体に乗じてガドの住民を追い出し、そこを占領して住んでいた。エレミヤは今彼等の裁きの日が来たことを告げる。「ラバは荒塚となり、村々は火で焼かれる。そのときイスラエルは自分を追い出した者を追い出す」と。昔私がバスでヨルダン河沿いの道を通ったころは、すぐ東に見えるヨルダン領からの砲撃にそなえて、至るところに待避壕の標識があった。その後湾岸戦争の頃になると、イスラエルを恐れるヨルダンの曖昧な態度が、世界の物笑いになった。

7月23日 今日に通読箇所 エレミヤ書 49章7～13

「やもめと孤児」

ここにはエドムが同じようにバビロン軍の侵略によって滅亡する予言が記されている。エドムの先祖はエサウで、弟のヤコブと家督権を争った人物だ。神のみ心が明白になったので、やむを得ず彼は弟に家督を譲って南方に移動しエドム地方に国を成した。それゆえ彼等は先祖以来、イスラエル人に対して一種の恨みとライバル意識を抱き、常に抵抗、略奪、攻撃をしかけてイスラエルを悩ませていた。いま彼等の上にも裁きが臨む。しかし[11 節]には、神の憐れみの

み心が示され、彼等が悔い改めて主に寄り頼むならば、生き残ったやもめや孤児などは、遺残者としてこの国に残されると語られている。

7月24日 今日に通読箇所 エレミヤ書 49章23～33

「旧悪の報い」

こう毎週神の裁き民族滅亡の予言が続いては、さすがのわたしも疲れる。しかし今は人が自分の責任を取らない時代だ。被害者意識だけが強く、自分の欲深さや不注意を指摘されることを好まない。若者も成り行きまかせの気風がはやっている。もう少し「神は侮られるお方ではない、人は自分の蒔いたものを必ず刈り取ることになる」という原則を考える方がいい。神とその裁きを侮った、ダマスコを首都とするシリア、ケダル、ハゾルなど北方の諸民族が、理不尽にイスラエルを苦しめた旧悪は今こそ報われる時となった。

7月25日 今日に通読箇所 エレミヤ書 50章8～20

「解放の予言」

今まで、強国バビロンに攻め滅ぼされる、イスラエル以下の中小諸国に関するエレミヤの予言を紹介した。バビロンはこの時、神の裁きを執行する機関として立てられたのだ。さてその乱暴極まるバビロンはいつまでも安泰繁栄を続けられるのか。そうではない。今度はもっと北方からペルシャが起こってバビロンは滅亡するだろう。しかもペルシャのクロス王は、捕囚のユダヤ人に解放帰国を許すことになる。[17～20節]はその予言だ。そして我々はこの予言が、エズラ記、ネヘミヤ記にその通り成就したのを知っている。

7月26日 今日に通読箇所 エレミヤ書 51章54～64

「悲しい成就」

いまバビロンの遺跡は発掘されて白日のもとに雄大な廃墟をさらしている。全くエレミヤの予言の通りだ。セラヤはイスラエル王が捕虜としてバビロンに移されるとき、旅行の宿営、食料などの責任を持った、王からもバビロンからも信頼された將軍だったろう。彼はエレミヤの弟子で、信仰によるその穩健さが買われたものと見える。エレミヤは彼にバビロン滅亡の予言の巻物と、それをユフラテ川に沈めるという象徴的行為を託した。エレミヤの予言集はここで一応終わっているようだ。次の最後の章は、彼の予言の悲しい成就の記事だ。これに続く「哀歌」は国の滅亡を目撃した彼の男泣きの章だ。

7月27日 今日の通読箇所 エレミヤ書 52章1～16

「焼野が原」

戦争中に東京は空襲で焼野が原になった。戦後のある日、私は本所に住む知人を尋ねてあの辺を歩くと、一面の草原で白昼虫が鳴いていた。さすがの私も悲しくて涙ぐんだ。先日亡くなった市川惣蔵先生は、復員して前橋に帰ってきた時子供の頃から住んでいた前橋が一面の焼野になっているのを見て、彼も簡単に泣くような男ではないのだが、やっぱり泣いたと話していた。今イスラエルはバビロン軍の攻撃によって焼き払われ、王は逮捕され、略奪と虐殺が欲しいままに行われ、神殿も荒らされ略奪された。真に哀れな話だ。

7月28日 今日の通読箇所 エレミヤ書 52章17～34

「エホヤキン王」

ここに逮捕されながら不思議に解放され、バビロンで安楽な余生を許されたエホヤキン王のことが記されている。実は彼はゼデキヤ王の兄で、前の王だったのだ。彼はエレミヤたちの勧めをいれてバビロンに降伏し、逮捕連行された。そのあとバビロンはかいらい王として弟ゼデキヤを立てたのだが、彼は愚かにもまたもやバビロンに叛き、決定的な亡国を招いたのだ。エホヤキンの運命は暗示的だ。彼はエレミヤの勧めによって神の裁きを受け入れ、バビロンに降伏した。その従順が彼を最悪の運命から救ったとも言えるのだ。

哀歌について解説がない箇所があります。

通読箇所が、数節抜けていますが補ってお読みください。

7月29日 今日の通読箇所 哀歌 1章

7月30日 今日の通読箇所 哀歌 2章

7月31日 今日の通読箇所 哀歌 3章 1～50